
魔法学校（使用者×供給者）

弓永 詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学校（使用者×供給者）

【Nコード】

N8192D

【作者名】

弓永 詩

【あらすじ】

お祖父たちが決めた勝手に決めた婚約者同士。しかし、婚約者は二人いた。しかし、二人とも美少女と来たものだ。どうすつる涼。しかも、他にも何かありそうな雰囲気だ。

妻×妻

日差しがまだ暑い、9月の始め俺は、なぜか警察沙汰になりかねないこの状況に置かれている。

「うっ、……」

どうみても、純日本人ではない顔立ちで金髪のかなりの美少女、抱擁な胸のわりに細く軽い体。そんな女の子が俺の上に乗っている。

「やべ、起きたかな」

俺はこの天国と地獄があわさった状況から出ようと頑張ったが、美少女を起こさずじょうとするとかなり難易度の高いミッションである。

この状況が起こる半日前。

「た、退学？」

担任から、いきなりその一言を聞いたときは俺は何かの冗談かと思っただ。

「ああ、お前は退学となった」

担任は真剣な表情で言ってるから本気なのであろう。

「あの理由があつたら教えてくれませんか？」

俺はせめと理由だけでも聞かないとやめるにやめれないから聞いた。

「実はな、退学といっても次の学校は決まっている。」

「はっ？」

俺は驚いて、とっさに言ってしまった。

「まあ、驚いても仕方ないが、実は、お前をこの学校に入学をさせるようにしろというのだ」

「はっ、話が見えてこないんだけど……」

「まあ、最後まで聞け。この学校は経営困難で、理事長がお前をこ

の学校に入れるかわりに、寄付金を受け取ってしまったんだ。ちなみに、両親も了承済みだ」

意味が分からなかった。いや、意味がわかっていたがあまりにも唐突というか…とにかくパニクった。

「大丈夫か？安心しろ。クラスのやつらには、俺から話しておいてやる」

「いやいや、最後の挨拶くらいさせるよ」

「そももいかんだ。もう迎えが来ているんだ」

その瞬間、突然中に浮いて、連れ去られた。

「おい、何するんだ」

「気にするな、お前の新しい学校まで連れてくるように頼まれただけだ」

「おい、つてか離せ」

力を入れて無理矢理、抜けようとしたがこの黒服はそれを許してくれなかった。

「んっ、何だここ？」

やけに、広い部屋にシャンゼリゼがあり、デカイベッドで寝ていた。

「そして、何でここで寝てるんだろ」

その後、さらに暴れる俺を黒服が気絶させられ記憶のないうちに、学校へと来たらしい。

「あら、気が付いたのでございますか」

黒髪に目がパツチリとした、モデル顔負けの抱擁な胸と容姿をした大和撫子という言葉がかなり似合う女性が入ってきた。俺はその顔に見とれていた。

「あら、どうかなさいましたか？」

おっ、そうだった。見とれている場合じゃない。

「ここはどこだ？つてか、お前は誰だ？」

聞きたいことは山ほどあるか、まずこれを聞く。

「あのここは、涼様が住まれる部屋でございます。そして、私は涼様の妻となる宮津堤静華でございます。」

「あっ、ここは住む部屋で、君は俺の妻となるほど…えっ、妻？」
驚きのあまり少し動転してまった。

「はい、あなたのお祖父様と私のお祖父様が許嫁の約束をなされた
そう、私が結婚出来る16歳となった今日、こうして学校に来て
いただいたしだいあります。」

おいおい、聞いてないぞ。あのじいさんは金持ちだったが、親とは
絶縁状態だったと聞いたんだがな。

「つつか、いきなり妻と言われても…そんなの知らねーぞ。」

「それは、そうでございます。もし、あなたに結婚を決めるにあたる
相手がすでにいたなら、このお祖父様たち同士の約束は破棄される
予定でしたので。しかし、調べた結果あなたには、そういう人は
いないと知りましたので、ここに来ていただきました。」
茫然自失となってしまった。

「じょ…冗談じゃない！そんなこと認めてたまるか」
ベッドからおりて、逃げるように部屋から出た。

しばらくして、少し頭が冷えたとこれで身を隠しながら考えてみた。
「いったい、なんだったんだ。ってか、妻って何だよ。いきなり退
学になるしさ。わけわかんないことだらけだよ」
それにしても、無駄に豪華で広いな。

「涼様。どこにいらっしやるのですか。」
さっきの女の声が聞こえる。気付かれないうちに逃げないといけな
いな。

逃げようとした瞬間。上から人が降ってきた。
そして、俺はの上からきた女の子を受け止め、警察沙汰になりか
ねない状態になった。

「涼様？」

「はい」

いきなり、名前を呼ばれてとっさに返事をしてしまった。

「りよ、りよ、涼様。この日を待ちわびていました」

何だ？この子、いきなり何を言うんだ。

「涼様。こんな所に…麗華何してるの。」

「お姉さまこそ…まさか、涼様を先に夫にするために…」

「違いますわ。私は」

「ストープ。意味がわからないから最初さら説明してくれ。次は逃げないから」

思わず、声をあげてしまった。

「そうですね。けど、さっきお話した通りなのでございます」「
といわれてもな、初対面で妻ですと言われて、はいそうですねと答えることは出来ないぞ」

「静華お姉さま、やっぱり、抜け駆けしようと思んでいたんじゃないですか」

「うふふ、そんなことはありませんわよ。それと涼様とは初対面ではございませんわよ」

「えっ、嘘？」

こんな綺麗な子会ったら忘れないはずなんだがな。

「はい、しかし今ここで先程述べたこと以上のことは話せられませんか」

「先程述べたこと以上のこと？やっぱり、他にも何かあるのか」

「今は言えません」

「はい。静華お姉さまのいう通りなので…」

そこで、俺は意識を失った。

学校×魔法

翌朝

「うっ、ここは」

そういえば、確かいきなり妻ですとか変な女に言われて逃げて、またもう一人現れて…どうなんだったけ？思い出せない。

「コン、コン。涼様、失礼いたします。」

ノックをして、こっちが返事をする前に入ってきた。

出た、すべての元凶の変な女。

「まだ、返事してないんだから入ってくんなよ。」
ちよっと切れ気味に言った。

「す、すみません。けど、早く涼様に会いたかったので…」

変な女は急に顔を赤らめて、下を向いた。

んっ、何だ？俺なんかした…

「おい、何で裸なんだ？」

気が動転して変な女に尋ねてしまった。

「それは、その私たちが脱がしたわけではございませんわ…ちゃん
と、執事に頼んで脱がさせていただいて、涼様の服は洗濯させて
いただいていますわ。」

女は顔を赤らめて上にあげたり下を向いたり拳動不審な態度をとり
ながら話した。

「いや…つてか、服はどこだ？」これ以上の追求は不毛だと感じ、
服の場所を聞いた。

「あっ、そうでしたわ。私たちの通う鳳凰高等学校の制服でござい
ますわ。サイズあわせもしておきましたので着替えてくださいませ」
変な女は、突然思い出したように話した。

「はっ、そんな急なこと言われても…」

「ボタン、静華お姉さま！やっぱり、涼様の所にいた。抜け駆けな
んでズルイですわ」

昨日の上から降ってきた変な女の妹が突然入ってきた。

「あらあら、はしたないですわよ麗華。それに抜け駆けなんてそんなことはしてませんわ」

変な女は笑顔で返す。

「じゃあ、何で静華お姉さまは涼様の部屋にいるのですか？」

「私は服を届けにきただけですわ。他に他意はありませんわ」

ああ、変な女が二人めんどくさいな。

「まあ、とりあえず…二人とも出ていけ」

そういうと、二人ともシヨボンとした感じで出ていった。

「はあ、なんなんだ。あの二人は、確かにホント綺麗なんだけど性格がな…」

そんな風に考えながら、静華という変な女が持ってきた制服を着ることにした。

「コンコン。涼様、そろそろ学校ですのでおいでになさってくださいませ」

静華が呼びにきた。

「はあ、わかったすぐ行く」

部屋を出た。

「お似合いですわよ、涼様」

青のブレザー制服を着た静華と白のブレザー制服を着た麗華が同時に言った。

「んっ、二人とも何で制服の色が違うんだ？」

頭に浮かんだ疑問を率直に聞いた。

「まあ、それは後程話しますわ」

静華がちよっと、何かを隠すように話した。

「そうですね。それよりも、早くしないと遅刻をしますので早く車に乗りましょう」

慌てながら、麗華が話す。

そして、疑問を持ちながらも高そうな車に乗って学校に行くことに

なった。

この学校はなんなんだ。この広さデかさありえないだろ。

「涼様、いきましょ」

「いきましょ、いきましょ」

宮津堤姉妹にそういわれて歩くと、なぜかみんなが、こそこそ話ながら俺たちを見ていることに気付いた。集中して聞いてみると。

「宮津堤様たちが男性と…」

「誰だ、あいつ。宮津堤様たちとどっという関係なんだ」

「嘘だ。あの男嫌いの宮津堤様たちが…」

「あの男、許さない」

驚きや、恨みの声が聞こえて少し…いや、かなり面倒事が起きるなと予想した。

その予想は、すぐに現実となった。

「おい、その男。宮津堤様たちと一緒にいるんだ！答えたまえ」いきなり変なナルシスト風の男が現れてイチャモンつけてきた。

「はあ、そんなのお前に関係ないだろ」

面倒臭いから、相手にしないことにした。しかし、宮津堤姉妹は予想に反して。

「私と涼様の関係は許嫁でございますわ。だから、これ以上涼様に見苦しい姿を見せないで下さいますか」

何か今までと違いかなり、圧力のあるしゃべり方を宮津堤姉妹が同時にした。

「そんな宮津堤様の許嫁…そんなの認めない。その男さえ倒せば。」突然、俺にナルシスト風の男は襲いかかってきた。

「おい、その変な姉妹、正当防衛つてのを後で説明しろよ」

その男の懐に入って、一撃パンチをくらわして、投げてやった。

「ふう、こんなもんか」

かなり弱いやつだったな。もうちょっと、手加減してやればよかったな。

「涼様：すごいですわ」

「ホント、何でこんなこと出来るんですか？」

姉妹が同時にはなしてきた。

「ああ、昔から自分の身くらい自分で守れるようになって、柔道、空手、剣道、合気道とあらゆる武術をならってたんだ」
少し照れ臭そうに話した。

「くそ、こんな惨めなままで終われない。」

ナルシスト風の男が立ち上がって、なんだかボソボソと何か言いながら。

「ファイヤーボール」

唱えた瞬間、火の玉が現れて、俺に向かってやってくる。

「うわ、何だこれ。」

動揺して体が動かなく駄目だと感じたが、その瞬間。

「ウォーター・ウォール」

静華が唱えた。それと同時に、麗華も。

「エアール・カッター」

そうすると、水の壁が火の玉を打ち消し、風の刃がナルシスト風の男に向かっていった。

ナルシスト風の男は気絶をした。「なんなんだ、今は」

動転する頭を、静めて必死に言葉を出した。

「それは…」

言いにくそうに静華は言葉が続かない。

「静華お姉さま、見られてしまったし、後で知られるのですから話しましょ。」

麗華は真剣な顔をして静華に話す。

「そうですね。これから、話すことは本当ですので、信じてくださいませ」

「ああ」

動転しながらも、話を聞くことにした。

「実は、私たちの学校は…魔法学校なのです」

魔法使い×無能者

「どうなってるんだ？火の玉や、水の壁やかまいたちって…」
目の前で起きている事実混乱した。

「それは、私からちゃんと説明させていただきますわ…けど、今はちょっと時間がありませんから、昼休みの時でも」

静華は混乱した俺に話しかけてきた。

それと同時に予鈴のチャイムがなり、学校が変わって始めてを遅刻するわけにはいかないので、疑問を持ちながらも静華のいう通りにしたかった。

ザワザワザワ。

クラスは話題の転校生を目のまえに騒がしかった。

「え〜、今日からこの神矢涼君はうちのクラスの一員なんで、仲良くしてあげてください」

この背が低くて可愛いらしい顔をした担任には確実に見えない花咲望が俺を紹介してくれた。

「え〜、神矢涼です。今日からお世話になるんでよろしく願います」

一般的な挨拶をした。

「パチパチ」

突然、二つの拍手がなり響いた。その二人とは。

「涼様素敵な挨拶でございました」

「涼様素晴らしいですわ」

宮津堤姉妹だった。当然、無視しようと担任が紹介してくれた席に行こうとしたが…

「なんですの？あの宮津堤姉妹があんな態度をとるなんて…」

「宮津堤様。どうなされたのですか、私たちの希望の星が…」

「あの転校生は何者だ。いや、何者だろうと許せない」

いろいろな罵声が聞こえて、クラスのほとんどが、俺を見ていた。しかし、俺は気にせず、席についた。しかし、着いた席は。

「涼様の右側ですわ」

「涼様の前ですわ」

と左の一番奥の席に座り、麗華と静華に囲まれている。

「何で、お前たちが…」

途中でもう、喋る気をなくした。どうなるんだろう、気を落とした。

昼休み、静華と麗華は憂鬱な俺を誘って食堂へと行った。

「で、説明してもらおうぞ。ここがあ魔法学校ってのはホントか？授業は前の学校よりレベルは高くなっているが、それ意外は普通の学校そのままだった。」

「そうですね。一つずつ説明させていただきますわ。まず、この学校には魔法に関わるものが集まっております。この学校に関わらず、いろいろな場所に魔法学校は存在しておりますわ。」

真剣に静華は話す。

「魔法って、そんな現実的にありえないだろ」

混乱しながら言う。

「いえ、ホントにあるのですわ、涼様」

麗華がいつてきた。

「例え、それが本当だとして、俺は魔法には関係ないだろ。何でここに…」

声がつまった。もしかして、俺にも魔法の才能が？

そんな期待はすぐに打ち破れた。

「はい、涼様には魔法を使う才能はありませんわ」

意外に大きなショックを受けた。「けど、魔法を…」

思わず俺は逃げた。

あはは、ちょっと調子に乗ってショック何か受けてしまったよ。こんな、ケンカくらいしか強くないやろうが才能なんてあるわけないよな。

「なさけね。」

歩いていると、チャイムが鳴った。しかし、俺は教室へは戻らなかつた。

そして、フラフラ学校内を歩いていた。すると、見覚えのあるやつと出会った。

「見付けました。朝の借りを返しに来ました」

それは、火の玉を出し、宮津堤姉妹にやられた男だった。

「いや、あなたが宮津堤様たちから、離れるのを待ってました。これなら、あなたを倒すことができる」

その男は俺への復讐が目的らしい。しかし、俺は。

「さつさと失せる。今は機嫌が悪いんだ」

男は一瞬、後ろに引き下がった。

「ふん、魔法も使えないお前など、敵ではないわ。くらえファイヤーボール」

そして、火の玉を俺に放った。

「ふん、そんな火の玉ごとき、油断してない今は食らうわけないだろ」

俺は火の玉を避けて、その男に襲いかかった。

「お前なんか、魔法なんてなくても倒せるんだよ」

そして、殴り倒した。

「ふっ、たいしたことないじゃねーか。」

ホッと息をつくくと、後ろから殺気を感じた。

「誰だ？」

後ろを向いて、言った。

「さすが、宮津堤様たちの関係者だね。私の名前は、本山大地。」
背は俺より高く、鋭い目をして茶色の制服を着たやつが現れた。

「何だ。俺に用でもあるのか？」

「いや、君には宮津堤様たちはもつたいないので、宮津堤様たちの前から消えてもらおうと思つて来たんだ」

また、宮津堤か。何なんだあの姉妹は！くそ、何で俺がこんな目に…

「なんだい君。黙つてるつてことは、消えてくれる気になったのかな？」

「うるせえ」

「なんだい、君。私とやる気かい？さっきのやつと比べてかなり強いぞ」

「うるせえつて言つてるだろうが。俺に指図するんじゃないやねえ。宮津堤も関係なえ、俺は指図されるのが大嫌いなんだ」

そして、俺は本山大地に襲いかかった。

「ふん、それならだ。アースクエイク」

唱えた瞬間に、地面が揺れた。

「クソ、何だこれ」

揺れのせいで立っているのがやっとだったが、俺は意地で本山大地の所まで行った。

「何？私のアースクエイクで倒れない」

「魔法なんて使えなくても前になんか負けない」

そういいながら、俺は本山大地を倒した。

「ふう、少しは気が晴れたな。教室に戻るかな」

そうだ。魔法が使えなくても関係ない。俺が魔法に負けなければいいんだ。

そう思いながら、教室に戻っていった。

しかし、これは幕開けにすぎなかったのだ。

実習×契約（前書き）

いやー、長らく書いてなくてすみません。これから、少しずつ書いていこうと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

実習×契約

「はぁ、疲れた」

俺はなぜか樹海にいた。

「なさないぞ、新入り」

この大柄で、いかにも体育会系な筋肉質で短髪な男は北瀬豪。

「そうだよ、いつもは外国にいたりもするんだから」

この一言で例えるなら猫といたくなるような、目が大きく髪は長めで女の子より女の子らしいこの男は村上晃。

「…」

そして、もう一人顔を髪で隠し、素顔が見れない女の子が雪村陽子である。

この四人で今回の実習を行うのである。

時を遡ること、昼休みの終わりのことである。

俺がバトルを終えて帰るやいなや…

「涼様〜！」

そっぴいなながら、長い綺麗な黒髪で、目がぱっちりとした大和撫子という言葉が似合うであろう宮津堤静華と純日本人とは思えないほど立派な金髪をした美少女の宮津堤麗華が同時に俺に飛びかかってきて押し倒されてしまった。

「おい、何だ。とにかくどける」

二人をどかさうとしたが、二人は悲しい顔をしていて。

「涼様〜違うグループになってしまいました」

静華は泣きそうな顔でいう。

「そうなのですよ、全く私と涼様を引き裂くなんて許せない」

麗華は怒りあらわにしながらいう。

「おい、状況が読み込めないんだが。そもそも、そのグループってなんなんだ？」

現状の説明を静華から受けた。

この学校では週に2回、午後の授業時間すべて使い実習を行うのである。そのグループは先生たちが決め、各グループに課された課題をクリアすることが目的だそうだ。

そういうことで、俺はこの樹海にいる。

「ふう、それにしても何でこんなことするんだ」

率直な意見を述べた。

「魔法を使用するには、精神的な力も必要になるから、精神を鍛えるためにするって聞いたよ」

村上が笑顔でいう。

「ふん、こんな演習で根をあげるやつなど、この学校にはいないが」

嫌味をいうのは北瀬である。

「そういうえば、神矢君の属性はなに？僕は空属性で、ランクはC」
そういうと、風を使ってすぐ近くの木の葉を切り裂いた。

「おっ、ワシもそれが知りたかった。なんたって、宮津堤姉妹を虜にするくらいの能力者なんじゃからな。おっと、俺は土属性でランクはCじゃ」

そういうと、小さな泥人形を作って見せた。

「…」

雪村は相変わらず無言だが、俺の能力に興味があるのか、こつちを向いている。「…ない…」

小声で、俺は答えた。

「はっ、なんだって？」

北瀬は、挑発的な態度でいつてくる。

「だから、俺は魔法なんて使えないんだ。この学校は周りが勝手に入れられただけなんだ」

三人は無言になる。口火をきつたのは北瀬。

「ふん、じゃあノーマルなやつがなぜこの学校にいるんだ。宮津堤姉妹も何を考えてこんな情けない奴の側にいるのか、何か弱味でも握っておるのか？」

「豪、言い過ぎだよ」

「うるさい、昇。あの麗しき宮津堤姉妹にこんなやつは相応しくないわ」

「豪、やめなよ」

村上は必死に止めようとするが、北瀬はここぞとばかりに俺をせめる。

「分かってるよ、この学校に俺がいることが場違いなくらい。けどな、こつちだつてこの学校に来た限り精一杯やってみせるさ」

「ふん、魔法も使えないやつが生き残れるほど、この学校は甘くないわ」

「残念だけど、そうかもしれないね」

二人ともに言い方は違うが、俺がこの学校で暮らすのは無理だと言われた。

「そんなの、やってみないと分からないだろ」

そう、今日だつて魔法使いとの戦いに勝ったんだ。大丈夫だ。しかし。

「けっ、お前今の状況がわかってないのか？」

「何のことだ」

「けどね、実際今だつて魔法をもたない神矢君は足手まといとなる

んだよ」

そういわれて、俺は何もいえなくなった。実際この状況で俺にできることはない。さつきも、北瀬は道のないところに道を作る魔法を使ったり、村上は木々を切り刻み道を作る手伝いをしていた。けど、雪村は。

「まあ、あいつみたいに魔法使いであつてもランクEの落ちこぼれじゃ、使い道がないな」

「おい、豪言いすぎだ」

「…」

彼女は無言のまま走つて、行つてしまった。

「おい、女の子一人ないじゃねーか」

俺は彼女を追いかけていった。

「言い過ぎたかもしれんな」

少し反省の色を見せる豪。

「全くだ」

ガサガサ…

「おっ、雪村と神矢か？さつきはすまなか…」

そこには、北村の倍はあるガーゴイルがいた。

「これが、今回の試験の本番か、さくつと倒して神矢と雪村を探しに行くか」

「そうだね、じゃあとつと倒そうか」

ふたりはガーゴイルに向かってそれぞれ、魔法を使つていった。

一方。

「雪村さん待つて」

彼女は足が少し遅いのか、俺が早いのかは分からないが追いつくことに成功した。

「はあはあ、女の子一人でこの樹海に迷い込んだら大変だよ」

「ほつといて」

今まで一言も喋らなかつた雪村さんが大声で怒りあらわに言った。

「ほんと、私なんて生まれてこなければよかつたんだ。」
悲しそうにつぶやく。

「私なんか、魔法ランクもEでクラスメイトから無能者呼ばわりされて、水と風の雪村家に生まれながら火の能力を持って生まれた私を異端者として扱われるんだから。私なんて必要のない人間なのよ」
言っている意味がよくわからなかつたが。

「そんなことない。何のことかよく分からないけど、そんな必要のない人間なんていないよ」

これは、雪村さんと自分に対する言葉だつた。

「気休めはよして、私なんて誰からも必要とされないんだから。あなただつて、そうでしょ魔法の力もないのにこんな学校にこざされて」

「そうだな…けど、俺は決めたんだ。この学校で暮らしていくつて決めたんだ」

「なんで、私みたいに無能力なのに…」
この子は、ここでずっと暮らしてきて、能力がないばかりに学校では虐げられ、家では自分だけ能力が違っただけで異端の見られるんだもん。俺だつて嫌になると思うぞ。

「大丈夫だ。雪村さんは雪村さんだ。魔法の能力なんて関係ない。俺は一人の人間として向き合つていきたい」

これは本心だ、まあ無能者俺なんかにこんな事言われて迷惑かもしれないが。

「ありがとう、私ホント言つとあなたがうらやましかったの。無能者なのに宮津堤姉妹のところ居場所があつて…けど、違うんだよね居場所は自分で作つていくものなんだよね」

そういつて、吹っ切れたような顔をしていた。そして、手首につけていたゴムひもで髪を後ろで結ぶ。すると。

「うっ…」

なんと、目がパッチリとして小顔で整つた顔があらわとなつた。

「ん、どうしたの。私が髪あげたら変かな？」

「いや、そんなことないと思うぞ」

むしろ可愛いと言おうと、思ったが口を閉じた。

「よし、じゃあ二人のことへも…」

「ギャー」

叫び声のようなものが聞こえた。

そして、叫び声と同時に北瀬と村上がいるはずのところから火柱が上がった。

「なんだ、いつたい。嫌な予感がするけどいつてみるぞ」

俺は状況把握が出来ないまま、火柱のほうに向かっていった。

「うん」

そこには、倒れている二人と羽をつけた馬みたいなやつがいた

「ガーゴイル…」

顔を真っ青に雪村さんは言う。

「そうだ、ガーゴイルだ。あいつは相当強い。Cランクの俺らでも歯が立たなかった。お前らなんて瞬殺されるぞ」

「そうだね、二人は早く樹海を出てきゅ…」

「このやる。」

俺は村上の助言を聞く前にガーゴイルに向かっていった。

「おい、やめろ」

「危ない」

それをみてか、ガーゴイルは俺に向かって今朝見たファイヤボールの3倍はあるかというものを撃ってきた。バーン。

「う、あぶね。もうちょっとで、丸焦げだったぞ。」

火の玉を警戒して、少し後ろに下がった。

すると、後ろからも小さいファイヤボールがとんできた。

「私にも手伝わせてください」
雪村さんは俺を援護するために、ファイヤボールを撃ってきたのだ。
「お前らじゃ、勝てない逃げろ」
「そうだよ、僕たちなら大丈夫だから逃げて」
二人は心配そうな顔で俺らに行言った。
「心配ない。勝つてやるからそこでみている」

それから、作戦を立てながら一緒に戦っていたが、あのガーゴイルは動きが一定なことに気づきたが、どうしても近くに行くためには超ド急のファイヤボールをなんとかしなければならなかった。

「くそ、あのファイヤボールさえなんとかできたら、体術で何とかなるのに」

俺が苦々しく言うと。

「分かりました」

そついうと、突然自分を火の玉に巻いて、ガーゴイルに向かいだした。

「私があファイヤボールに直撃して、隙を作りますからそのうちに攻撃を」

「おい、そんなことしたら雪村さんが…」

「いいんです、わたしならなんとかかります」

「そんなの駄目だ。」

力いっばい言ったが聞く耳をもたれなかった。

しかし、突然。雪村さんの体の周りから、炎が消えた。

「うっ…もつきちゃったのか、雪村家に生まれたんだから、火の源は少ないことは分かっていたんだ…」

「どうしたんだ？」

何が起こっているのか、まるで分からない。

「はじまっちゃったのか。」

豪は悲しそうに言う。

「神矢君、僕たち魔法使いは15歳から成人になるまでに自分の魔力だけじゃ魔法を使えない体になるんだ。だから、魔力を供給してくれるマスターを見つけ出し契約しなければならぬんだ。そうしないと、雪村さんみたいになるんだ」
雪村さんを見ながら言う。

すると、頭の奥底から。

(お主なら、彼女のマスターとなれる)

「ん、何だ今の声」

いきなり、変な声が聞こえたかと思っただけでやんだ。

「どうしたんだ、神矢君」

心配そうに村上はこっちを見る。

「…おい、その契約ってどうやるんだ。」

「契約には条件があるんだ。マスターは自分の持っている能力者としてしか契約が出来なく、また個人別の条件も存在するんだ。すべての条件を満たしたものとだけ口付けを交わすことで契約されるんだ」

「よし、分かった」

「よし分かったって…もしかして」

俺はすぐに雪村さんの傍にいった。

「雪村さん、大丈夫か？」

「えへへ、私の魔法使いとしての最後もあっけなかつたよ。これだと、家も学校も追い出されちゃうな。ホント居場所も出来たのに…」
涙を流しながら、小さな声で

「私まだ魔法使いのままでもいいよ…魔法使いのままです」

「大丈夫だ」

俺は雪村にキスをした。

「ん…なにするのこんなところで。」

雪村は唇をすぐに離した。

「なにつて、契約だ」

「契約つて私のはじめてを…えつ、契約？」

顔を真っ赤にして抗議しながら、驚いた表情になった。

「ああ、ために炎を出してみな」

彼女は言われるがままに炎を出す。すると、今までと違い青色の強力な炎が現われた。

「嘘、これが私の炎なの…」

「そうさ、これはお前だけの炎だ。雪のように冷たいように見えるがその炎はすべてを焼き尽くす炎だ」

「私だけの…」

また雪村さんは涙を流す。

「まあ、とりあえずあのファイヤボールを頼むな」

ガーゴイルに向かって走り出した。

「ブルー・レイズ」

そういうと、青い炎は矢のような形でファイヤボールを粉碎し、衰えぬ炎でガーゴイルに刺さった。そこえ、俺が蹴りを入れて倒れた。そして、雪村の炎で焼きつく尽くしていくと、粘度になった。

「大丈夫か、お前ら」

「ああ、それにしても雪村つて美人だったんだな」

北瀬は雪村さんの顔を見てまじまじ言う。

「いやそんなことより、あの青色の炎の威力はAランククラスだよ」

「そんな…」

雪村は恥ずかしそうに下を向いている。

「まあ、何はともあれつて…」

少し歩いていくと出口というか、クラスのみんながいた。すると。

「涼様。」

いつものように、宮津堤姉妹が飛び掛つてきた。

「大丈夫でしたか？ん、そのおんぶされている女性は誰ですか？」

「涼様は私のご主人様です。キスした中です」

唐突に雪村さんが言った。

「はあー」

宮津堤姉妹が同時に叫んだ。

「いや、これには深いわけが…」

必死に弁解したが

「私たちというものがあんなから…この女」

姉妹は同時に雪村さんを睨む。

「雪村さん、誤解をまねくようなこといわないで。」

「涼様、陽子と呼んでくださいよ」

人の話聞いてないし、キャラ変わってるよ。

このあとの女性人たちは永遠とバトルしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8192d/>

魔法学校（使用者×供給者）

2010年10月23日21時40分発行